

- 28:1 こうして助かってから、私たちはこの島がマルタと呼ばれていることを知った。
- 28:2 島の人々は私たちに非常に親切にしてくれた。雨が降り出していく寒かったので、彼らは火をたいて私たちみなを迎えてくれた。
- 28:3 パウロが枯れ枝を一抱え集めて火にくべると、熱気のために一匹のまむしが這い出して来て、彼の手にかみついた。
- 28:4 島の人々は、この生き物がパウロの手にぶら下がっているのを見て、言い合った。「この人はきっと人殺しだ。海からは救われたが、正義の女神はこの人を生かしておかないとだ。」
- 28:5 しかし、パウロはその生き物を火の中に振り落として、何の害も受けなかった。
- 28:6 人々は、彼が今にも腫れ上がってくるか、あるいは急に倒れて死ぬだろうと待っていた。しかし、いくら待っても彼に何も変わった様子が見えないので、考えを変えて、「この人は神様だ」と言い出した。
- 28:7 さて、その場所の近くに、島の長官でプリウスという名の人の所有地があった。彼は私たちを歓迎して、三日間親切にもてなしてくれた。
- 28:8 たまたまプリウスの父が、発熱と下痢で苦しんで床についていた。パウロはその人のところに行って、彼に手を置いて祈り、癒やした。
- 28:9 このことがあってから、島にいたほかの病人たちもやって来て、癒やしを受けた。
- 28:10 また人々は私たちに深い尊敬を表し、私たちが船出するときには、必要な物を用意してくれた。

<説教>

使徒パウロは囚人の一人として船に乗せられてローマに向かって地中海を旅していました。途中、クレタ島の沖で暴風に曝され巻き込まれてしまい、漂流することになってしましましたがパウロは希望を失いませんでした。彼がしっかりと主イエス・キリストを、神を仰いでいたからです。神も御使いを通してパウロに約束してくださいました(24)。それでパウロは皆に元気を出すよう励まし、神のみことばはそのとおりになるのだから必ずどこかの島に打ち上げられると断言しました(26)。14日目の夜が明けかけた頃には皆に食事をするように言って、自らパンを取って皆の前で神に感謝の祈りをささげてから食べました。そうやって再び皆を励まし、元気づけました(35)。その後、船は座礁してしまい、パウロは他の囚人たちと一緒に殺される危険に曝されましたが、神は百人隊長を通してパウロたちのいのちを助けてくださいました。泳げる人たちは海に飛び込んで泳ぎ、残りの者たちは板きれなどにつかまり、全員が神の約束のとおり、助かったのでした(44)。

パウロたちがたどり着いた場所がどこだったのか、初めは分かりませんでしたが、そこはマルタと呼ばれている島でした(28:1)。そこは、ローマがあるイタリア半島のすぐ南にあるシリー島のそのまたすぐ南でした。その島の人々は当時の地中海世界で広く話されていたギリシア語とは違う言葉を使っていた、原住民でした。そんな、言葉が違う異文化の人々でしたが、彼らは遭難者を「よそ者はこの島から出て行け」などと追い出そうとはせず、〈非常に親切にしてくれ〉ました。時は冬の初めて、降り出していた雨は冷たく寒

かつたので、彼らは火をたいて避難民 267 人みなを迎えてくれたのです(2)。

そんな時、パウロがまむしにかみつかれるという事件が起こりました(3)。まむしがパウロの手にかみついたままぶら下がっているのを見た島の人々は、パウロが人殺しの重罪人に違いないと考えました(4)。もちろんこのとき、彼らはパウロがかつてキリスト者や教会を酷く迫害していたことを知ってそう言ったのではありません。彼らの考えは、やはり、ある人に何か良くないこと悪いことが起こると、それはその人が何か特別悪いことをしたからに違いないということだったのでしょう。もっとも、そんな考えは何もこのときのマルタ島の人々だけのものではないとも思います。ユダヤ人もそうでした(cf.ヨブ記、ルカ 13:1-5、ヨハネ 9:2)し、私たちにもそういう考えはどこかにあると思います。もちろん、そんな短絡的な、いわゆる「因果応報」的な思想は間違っています。そして、〈正義の女神〉と言っていることからも、マルタ島の人々が真の神を知らなかつたということは分かります。

しかしパウロはここでも騒がず慌てず、冷静に行動しました(5)。それは、ここでも彼は神に、主イエス・キリストに信頼していたからだと言うほかありません。主イエスはかつて弟子たちに言されました。「全世界に出て行き、すべての造られた者に福音を宣べ伝えなさい。信じてバプテスマを受ける者は救われます。しかし、信じない者は罪に定められます。信じる人々には次のようなしるしが伴います。すなわち、わたしの名によって悪霊を追い出し、新しいことばで語り、その手で蛇をつかみ、たとえ毒を飲んでも決して害を受けず、病人に手を置けば癒やされます。」(マルコ 16:15-18)。このみことばをパウロも弟子たちから伝え聞いていたに違いありません。この主イエスのみことばをパウロは思い起こし、このみことばに、主イエスに信頼していたに違いありません。

さて、マルタの人々は、自分たちが期待したようなことがパウロの身に起きなかつたので、今度は一転、たちまち考え方を変えて、「この人は神様だ」と言いました(6)。ついさっきまで「きっと人殺しだ」と言っていたのに今度は「神様だ」と言う、この人々の考え方の変わりようは面白いほどです。しかし、笑ってばかりはいられません。やはり彼らは迷信、偶像崇拜に陥っていました。そういうえば、かつてリステラでも似たようなことがありました。生まれつき足の不自由な人にパウロが語りかけ、彼が飛び上がり歩き出したのを見た群衆は「神々が人間の姿をとて、私たちのところにお下りになった」と言い、バルナバをゼウスと呼び、パウロをヘルメスと呼んで、いけにえを献げようとまでしました。しかしその後すぐにユダヤ人たちに抱き込まれた群衆はパウロを石打ちにし、パウロが死んだと思って町の外に引きずり出したということがありました(使徒 14:8-19)。マルタ島でのことは「逆パターン」ですが、そんな普通の人間の「変わり身の早さ」は驚くべきものです。

そんな経験をもう何度もパウロはしていたのでしょうか。そのとき既に記していたコリント教会への手紙で言っています。「(わたくしたちは)ほめられたりそしられたり、悪評を受けたり好評を博したりすることによって、自分を神のしもべとして推薦しているのです」(IIコリント 6:8)と。私たちも似たような経験をします。私たちが主イエス・キリストを信じる信仰によって神に従い人々の間で語り行動するとき、それがたまたまその人々の益となり、気に入ることなら「さすがクリスチャンだね。いいね、素晴らしいね。」とほめられたり好評を博したりします。しかし同じく信仰により神に従って語ったこと行つ

たことが人々の不利益、気に入らないことだと「だからクリスチヤンは心が狭い、キリスト教は日本では通用しない」などとそしられ悪評を受けます。またはやはり似たこととして、こんなこともあります。聖書を学び、感謝感激して、眞の神を信じ、主イエスを信じる、信じたいと言う人が、更に進んで（洗礼の学びに入るとかして）行く中で、祖先崇拜や偶像礼拝が駄目な話しひとか、十一献金の話しひとか具体的な信仰生活の話しひになった途端に血相を変えて「それはできない。それならもう止（やめ）る。」と言って教会に来なくなってしまう、そんなことがあるのです。そんな悪魔と罪の惑わしが満ちているこの世で、私たちは何とか忍耐して、つまり信仰に、主イエス・キリストのうちに踏み留まって、神のみこころを求め、主イエスに従って、主のわざに励まなければなりません。世の人々から「人殺しだ」と言われようとも（もちろん本当に殺してはいけません）、「神様だ」と言われようとも（もちろんそんな言葉に喜んではいけません）、〈神のしもべ〉としての証しを立てる必要があります。

このマルタ島でのそんな「神のしもべ」としてのその後の〈三日間〉に始まり〈三ヶ月〉(11)に及ぶパウロたちの生活の一つの様子が 7-10 節に記されています。もちろん、この間も神が、主イエスがパウロとともにおられ、ともに働いてくださいました。祈ったのはパウロでしたが、癒やしたのは主イエス・キリストでした(8)。また 9 節に記されている「医療活動」では医者だったルカも積極的に関わったことでしょう。

こうしたマルタ島でのパウロたちの生活を通して、やはり主イエスの力がパウロたち、神のしもべの信仰によることばと行いによって証されたことは確かでした。マルタ島でも主イエスは神のしもべとともにおられました。今私たちが置かれているこの地でも、同じ主イエスが私たちとともにおられます。私たちも同じ証しを立てて行きましょう。